



西洋の形相的（形相的）天観

The Western Formal View of Heaven

序論:天観・地観・人間観の重要性

西洋近代性の中心要素は天観・地観・人間観の変化にある。

- 近代西洋の世界観の転換:

地動説とカルヴァンの救済予定説いずれも、天観・地観・人間観に対する観点の変化を示す代表的事例

- 実存と生存の基本的土台:

天観・地観・人間観は、人間の実存と生存に直結する最も基本的な哲学的土台として作用

- 文明変化の尺度:

時代の画期をなす近代のような変化は、天観・地観・人間観の変化がその尺度となる

「天観・地観・人間観は人間の実存と生存に直結する最も基本的な土台であるため、時代の画期をなす近代のような変化は、天観・地観・人間観の変化が尺度となる。」

プラトンのイデア論と天地人三才

東西洋いずれにおいても天地人三才は宇宙認識の根本土台として作用してきた。

- プラトンのイデアと天地人の関係:

目に見えないイデア世界は東洋の「天」に、目に見える世界は「地」に、観察する存在は「人」に対応

- 西洋と東洋の宇宙観の関連性

プラトン哲学においても宇宙・神・人間という三つの次元の構造が天地人三才と類似した形で現れる

- イデア論の核心:

目に見える宇宙は目に見えないイデア世界の反映であるという観点－形相的天観の根幹



アリストテレスの形相-質料論

アリストテレスはプラトンのイデア論を現実的に再解釈した。

- プラトン理論の実用的変形:
イデアを形相(形相, *eidos*)、現実世界を質料(質料, *hyle*)として再解釈し、実践的な宇宙論を提示
- 形相と質料の結合:
形相的な天(天、本質)と質料的な地(地、現象)の結合により事物と変化を説明
- 人間の位置:
人間は天の形相を地に具現するのを助ける媒介体として、天地の間に位置する
- 存在論的世界観の始まり:
変化を実体として説明する存在論的思惟の基礎を確立し、西洋哲学の根幹を形成

「アリストテレスにおいて、形相的な天、質料的な地の形態で現れる宇宙は、天の形相が地を質料として変形させた世界として現れた。人間は天の形相を地に現れさせるのを助ける存在と見なされる。」

西洋の存在論的思惟体系

西洋思惟において変化と存在は「実体」を土台に説明される。

- 実体論的思考様式

変化の過程を論理的に説明するためには、必ず実体として説明されねばならないという存在論的理論

- 思惟の方向性:

東洋の全体から部分へ、上から下へと思惟する方式と異なり、西洋は部分から全体へ、下から上へと拡張される思惟体系を採

- 択

本質と現象の区分:

西洋存在論では本質(形相)と現象(質料)が明確に区分される 東洋の一元論的思考と異なり二分法的構造を形成

「存在論と生成論は、今日、東洋と西洋を区分する主要な思惟体系となる。西洋は実体を通じて変化を説明する存在論と言える。」

アリストテレスの四原因説と四元素説

四原因説(四原因説)

- 形相因(形相因):
事物の本質と形態を規定する原因
- 質料因(質料因):
事物を構成する物質的基盤
- 作用因(運動因(作用因):
事物に変化を起こす外部原因
- 目的因(目的因):
事物が志向する最終目標

四元素説(四元素説)

- 地(地):
大地、圧縮と爆発の元素
- 水(水):
水、収斂と下降の元素
- 火(火):
火、拡張と上昇の元素
- 風(風):
風、膨張と移動の元素

存在論的宇宙観の土台

アリストテレスの実体論は、変化の過程が論理的に説明されるためには必ず実体として説明されねばならないという存在論的理論である。四原因説と四元素説は西洋形相的天観の核心的土台となった。

形相と質料が結合する目的と作用が実体を形成する四原因であり、質料が区分されたものが地水火風の四大元素である。こうした理論は17世紀まで西洋において宇宙を説明する最も合理的な理論と見なされた。

東西思想の相違点

西洋の存在論的思惟	東洋の生成論的思惟
変化の原理 変化を実体として説明する存在論的体系 実体を仮定しない生成論的体系 実体としての形相(eidos, form)が質料に作用 陰陽五行のように属性の変化として説明	変化の原理
世界認識の方 向 下から上へ(部分から全体へ) 本質(形相)と現象(質料)の二分法的区分	世界認識の方 向 上から下へ(全体から部分へ) 現象と本質の一元論的統合
核心理論と応用 四原因説と四元素説(地水火風) 変化の原因を実体的に究明(解剖学の発達)	核心理論と応用 陰陽五行の相生相剋体系 感応とフラクタル的变化の説明(生体医学の発達)

「東洋が陰陽五行によって変化を属性として説明するとすれば、西洋の地水火風は実体として説明するという差異があり、この差異は東西洋の近代性と世界観に大きな影響を及ぼす。」

結論および意義

西洋の存在論的天観が持つ哲学的意味と現代的含意

- 実体論に基づく世界観

プラトンのイデアから、アリストテレスの形相-質料論へと連なる西洋哲学の根幹は、天観・地観・人間観の存在論的構造を形成する

- 東西思惟の構造的差異:

変化を実体として説明する西洋の存在論と、実体を前提としない東洋の生成論の対比は、文明発展の異なる経路を説明する

- 現代的意義

今日の科学パラダイムと世界観の形成に依然として影響を及ぼす存在論的天観の遺産を理解することは、東西洋文明の融合と相互理解のための哲学的土台となる

「要するに、西洋の存在論的天観はアリストテレスから始まる地水火風の世界観に代表される。下から上へ事物を観察する西洋の場合、本質と現象で実体は区分され、現象は本質である形相が現象である質料を実体として変化させるものである。」